ビオトープで遊ぼう（水生昆虫の観察）実施報告

―第55回広島大学大学祭に参加して―

技術センター　理学部等部門
研究実験技術班　塩路 恒生，青山 幹男
工学部等部門
安全衛生管理技術班　清水 高

1. はじめに

工学部西側の松林と角脇川に囲まれた区域には，自然の湧き水による湿地帯があり，水生昆虫やメダカ，カエル等の多種多様な生物が生息しており，「工学部ビオトープ」として利用されている．また，松林にはエヒメアヤメ，サギソウなどの希少植物も自生している．

地域社会に自然豊かなキャンパスの情報と水生昆虫とのふれあいの場を提供する事を目的として，本年度初めて大学祭の行事として技術センター主催の企画を計画し実施したので報告する．

2. 実施日時

平成18年11月4日（土）11:00～17:00

3. 実施場所

工学部ビオトープ周辺（角脇川周辺）

4. 企画概要

（1）ビオトープ内に生息している水生昆虫の観察の場を提供した．
（2）事前に確保しているメダカをプレゼントした．
（3）ビオトープ内に植えている花菖蒲の株分け苗をプレゼントした．
（4）昆虫・メダカのお絵かきの場を提供した．
（5）参加者へのアンケート調査を行った．

5. 企画までの準備

8月と9月の2回，工学部等部門，理学部等部門，先端物質科学研究科部門のスタッフにより，ビオトープの草刈り・整備作業を行った．

6. 当日のようす

参加者：小学生37名，幼児23名，大人101名
合計168名

技術センター職員10名が，朝8時30分より準備作業を開始し，テントの設営，危険防止の安全ロープ張り，案内板の設置等を行った．

会場看板

受付では，参加者に企画の内容と注意事項の書いたプリント・メダカの飼い方，ハナショウブの育て方の書いたプリント・アンケート用紙の配布を行った．

朝から自前の虫取り網をもった親子がたくさん訪れた．

参加者は，平均で1時間，長い方で2時間ぐらいビオトープでの体験を楽しまれました．

プレゼント用のメダカは，数百匹準備し，1人に4～5匹のメダカをペットボトルに入れて水草をそえてプレゼントした．

ハナショウブの苗は，ピンクと白を各100株ずつ準備し，1人2株ずつ配布した．

観察・お絵かきコーナーとしてテントを設置し，参加者に自由に生き物の絵を書いてもらった．

メダカをいっしょうけんめい追いかける子供たち．

夢中になって，おもわず湿地のなかに裸足で入っていく小さな女の子．

取れたかな？熱心に網をのぞきこんでいます.

さわやかな秋晴れの一日，子供の頃を思い出されたお父さん方もたくさんおられました.

会場となった「工学部ビオトープ」は，ふだんから自然の触れ合いの場として親しまれています.

女の子に人気のあったお絵かきコーナーでの力作.

当日は，ニホンアカガエル，マツモムシ，イモリ，オオコオイムシ，ヤゴ（写真），カワニナなどの水生生物を観察することができました.

捕まえたメダカや水生昆虫などは，またもとの場所に返してあげました.

7. アンケートの結果

配布数60部（回答42部）

問1. あなたはこの企画をどこで知りましたか？

- 当日会場に来て（18名）
- 人から聞いて（7名）
- 幼稚園・保育所のポスターを見て（5名）
- 大学のポスターを見て（4名）
- 大学のパンフレットを見て（4名）
- 大学のホームページから（3名）

問2. ここの場所はすぐわかりましたか？

・わかった（35名）

・わかりにくかった（6名）

問3. ビオトープの体験は楽しかったですか？

・とても楽しかった（34名）

・まあまあ楽しかった（5名）

問4. 来年もこの企画があれば，また遊びに来たいですか？

・ぜひ来たい（32名）

・また来てもいい（8名）

問5.「こんなことができたらいいなあ」と思ったことがあれば書いてください.

・捕まえた虫を家に持ち帰りたい

・春や夏の自然の様子を知る展示があれば良い

・年に2回ぐらいこの企画をしてほしい

問6. この企画に参加して，感じたこと，思ったことを自由に書いてください

・いろいろなアドバイスをいただき大変楽しかった

・自然にふれあえて良かった

・ビオトープを学校でつくり，授業に活用できたら良い

・ビオトープの生物の拡大展示をしてほしい

・外からの持ち込みがないように気をつけて

・小さな命も大切に

6. 今後の課題

・子供が一時的に集中して虫取り網が不足したこと，またメダカプレゼントのコーナーでのメダカの受け渡しが混雑してしまったことなど，参加者が殺到したときにどう対処すべきか今後考慮する必要があると感じた.

7. おわりに

ビオトープの言葉の意味とは「まとまりのある景観をもつ野生生物の生息する地域」と定義されています．この企画を行ったビオトープを含め，角脇川と工学部の間の一帯の里山的自然は，長く継続的に行われてきた里山管理により守られてきた貴重な自然環境であります．キャンパスでのビオトープ管理を考える時,「自然生態系の保全」が本来の目的となるべきであり，それに配慮した維持管理が必要であると思われます．また，このような自然環境の学習の場を地域社会の人々に提供できることは，大学にとって有意義なことと考えます.

8. 謝辞

この企画は，技術センター主催として行いました．協力いただいたスタッフの方々に深く感謝いたします